

時宗総本山清浄光寺所蔵史料について

遠山元浩* 皆川義孝**

About the Head temple Ji-sect Syoujoukou-ji Holding Historical Records.

Motohiro TOOYAMA* Yoshitaka MINAGAWA**

要約

本稿は、時宗総本山清浄光寺所蔵史料を新出中近世史料と共に概説的に紹介。史料群より室町幕府が発給した二点の過所を取り上げ、その分析を通じて、関東拠点寺院としての清浄光寺が軸となり構築された、人とモノの交流史に対する可能性を論考する。なお本研究はJSPS科研費 25370801 基盤研究(C)「清浄光寺新出史料を中心とした関東拠点寺院における中近世移行期交流史の基礎的研究」の研究成果の一部である。

一 清浄光寺所蔵新出中近世史料とその可能性

はじめに

平安時代後期、浄土信仰は、来世利益を求める人々に受け入れられ全国展開する。これは自力本願系仏教における現世利益と共存し成立している。平安末期から鎌倉時代になると阿弥陀仏への帰依と共に専

修念仏を突き詰めることによって民衆を導く形式が確立し、浄土門の法然による浄土宗、親鸞による浄土真宗が誕生する。そして浄土宗西山派の祖、証空門下の聖達の弟子となる一遍(注1)が誕生。その念仏勧進の姿は遊行・賦算・踊り念仏に集約する。一人の念仏行者としての生涯は兵庫観音堂(現在の兵庫県神戸市真光寺)に於いて入寂するが、その意思は真教(注2)により引き継がれ、念仏教団として成

*駒沢学園寺院資料研究センター主任専門調査員・遊行寺宝物館館長

**人文学部 日本文化学科

立させる。真教は遊行の後に相模国当麻に無量光寺（現在の神奈川県相模原市）を嘉元二年（一一三〇四）に建立。三代智得（注3）へと遊行を相続した後に独住する。智得から四代吞海（注4）への遊行相続後に内部対立が発生、吞海は教団維持の為に無量光寺の一時的な切り離しを決断。実兄、俣野五郎景平が治める俣野荘に身を寄せ、正中二年（一一三五）景平の帰依をもって清浄光院（注5）を建立する。これが、現在における時宗総本山清浄光寺の始まりである。吞海以降の歴代遊行上人は、遊行相続した後に清浄光寺に入り藤沢上人となった。そのため清浄光寺は、遊行上人のいる寺「遊行寺」として親しまれ、記録上でも「遊行寺」として記載される事となる。清浄光寺に残る記録に関しては『藤澤山日鑑』など一部の史料を除き、現代に至る迄に戦火・火災・天災などに伴い、その多くが消失しているとされてきた。しかし、清浄光寺が設立母体である遊行寺宝物館における近年の調査により、予想以上の史料が残存し伝えられてきたことが判明した。この度、この清浄光寺に伝わる史料を元に平成二十五年度科学研究費助成事業「清浄光寺新出史料を中心とした関東拠点寺院における中近世移行期交流史の基礎的研究」（平成二十五年度・平成二十七年・基盤研究C）を獲得し寺院史料を用いた交流史の一端を解明する事となった。

（1）研究にあたっての基礎的情報

東海道の古刹として親しまれ藤沢道場と称された、神奈川県藤沢市にある時宗総本山清浄光寺は、正中二年（一一三五）の創建以来、約

七百年の歴史をもった全国時宗教団の中心であり、関東における拠点寺院の一つである。総本山である清浄光寺の住職は時宗教団の法主であり統率者である。そのため清浄光寺には全国時宗寺院はもとより、中近世における武家・公家・寺社との交流を示した史料などが保管されている。これらの史料を扱うにあたり、押さえておきたい事柄が幾つかある為、ここに記載する。まず基礎的なこととなるが、浄土門である時宗の本尊は阿弥陀仏である。同時に六字名号（南無阿弥陀仏）そのものが本尊であるとする。これは遊行の精神と行体を主とする時宗らしいところでもあり、旅先において本尊となる阿弥陀仏像が無い場合でも、遊行上人がその場で書いた名号を本尊として掲げられるのである。そして所依の經典は浄土三部經（無量寿經、観無量寿經、阿弥陀經）であり、特に阿弥陀經を正所依とする。

次に、この「時宗」という宗門名称である。この「時宗」と表記した場合には近世以降の教団を表現する際に使用すべきである。時宗はもともと「時衆」と表記されており、「昼夜六時に一堂に会して、阿弥陀仏を拝み、西方往生を願う僧尼集団の構成者たち」の事を指していた。後に一遍を開祖とする遊行上人を指導者と仰ぐ僧尼の集団「時衆」の事を示すようになる。なお「時衆」の「時」とは、六時（晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜）の「時」の事である。「衆」とは和合衆団の事。語源は善導著『観經玄義分』巻第一「道俗時衆等 各発無上心 生死甚難厭 佛法復難欣」この中の「道俗時衆等」が「時衆」の語源としている。言葉としての「時宗」は、徳川幕府が行った仏教教団統制の中で定められた名称であり、時衆が寛永十年（一六三三）

幕府に提出した末寺帳（内閣文庫・国立公文書館蔵）の表題に、『時宗 藤沢遊行 末寺帳』とある。これが「時宗」と表記された最古の記録となる。その為、中世における時宗を表す場合には「時衆」とするべきである。

次に遊行上人と藤沢上人である。この区別と解釈ができなければ、残された史料を正確に読み取る事ができなくなる。教団内における法主とは遊行の法燈相統者の事で、遊行上人と言う。この遊行の法燈相統とは、一遍を始祖とする遊行の精神と行体を相統することであり、遊行上人となれば、諸国を遊行し、賦算を行い、浄土信仰の教化をおこなう。併せて宗門としての傳宗傳戒の伝燈師として法要儀式を執行する（『宗教法人「時宗」宗制並宗規』）。そして遊行行為を次世代に相続した後に藤沢上人を名乗り独住する。真教・智得までの独住場所とは当麻山無量光寺であったが、吞海以降の独住場所は本山清浄光寺となった。なお、遊行上人は遷化した場合を除き、遊行相続した後に藤沢上人となり独住をする。これらの事より、独住した上人を「藤沢上人・住山の本主」、遊行相続した上人を「遊行上人・遊行の本主」とも称する。藤沢上人は遊行上人であったことにより上位とされる。また、遊行相続のタイミングや諸事情により遊行上人号のみ、藤沢上人号のみを名乗った上人もいる。そして、明治十八年（一八八五）遊行六十代藤沢四十三世一真以降は、遊行上人と藤沢上人を同時に相続する形となる。

以上のような注意点をふまえたうえで、遊行上人のいる寺「遊行寺」としての清浄光寺を精査すべきである。遊行上人は、各地の武家・公

家・寺社との交流を行い、その史料は本山である清浄光寺にいる藤沢上人の元に集約されてきたと考えられる。しかし、度重なる戦火・火災・天災などにより、その多くは失われ、現存する史料は僅かもののみであるとされてきた。その為『藤澤山日鑑』など一部史料の目録・翻刻に伴う考察以外は、対象とされる事は希であった。

（2）交流によって形成されたもの

清浄光寺の歴史を概観すると、古東海道沿いの拠点寺院としての位置づけと共に、清浄光寺の門前町として形成された藤沢を含めた交通や文化の要衝として発展した事が分かる。そこで、清浄光寺に残された史料から周辺地域との交流をうかがい知ることができる事を幾つか上げてみることにする。

応永二十三年（一四一六）から同二十四年にかけて、前関東管領上杉氏憲と鎌倉公方足利持氏の対立によって生じた上杉禪秀の乱では、鎌倉公方足利持氏に属した上杉氏定が禪秀方に敗れて清浄光寺で自害し、禪秀方の部将・岩松満純は清浄光寺に葬られたとされる。その際、遊行十四代太空が怨親平等碑（国指定史跡『藤沢敵御方供養塔』）を建立している。これは戦場などで死んだ敵味方の死者の霊が弔われなままに放置された事を憂い、念仏によって救済した鎮魂行為であり、恩讐を越えて平等に極楽往生させることを目的としている。碑文には「戦火で落命した敵味方の人畜の往生浄土を祈願し、碑の前で僧俗が十念を称名すべし（原漢文）」とある。これより、疫病の流行や不吉な事件をすべて政治抗争に敗れて世を去った者の怨霊の祟りを畏れる

御霊信仰的要素も入り込む。この事が後に『小栗実記』『小栗外伝』『小栗判官照手姫』などの舞台としての清浄光寺へと繋がるのである。これら「おぐり」とは、一般的には浄瑠璃や説経節など物語の題材であり、清浄光寺塔頭寺院の長生院が発行した『小栗略縁起』では、史実としての「おぐり」が今に伝えられている。物語としての「おぐり」には常陸国（現在の茨城県）の判官小栗満重（又は、その子、助重）と相模国藤沢宿の近くの豪族横山大膳（盗賊の説も）の家に故あって身を寄せていた照手姫の二人が中心となる。二人の間を取り持つ人物として「遊行上人」が登場する。物語中、小栗満重は地獄に落ち、閻魔から餓鬼阿弥として遊行上人に託され、土車に乗り、復活をとげる為に向かった場所が熊野であった。この熊野は、一遍が熊野本宮証誠殿の前にて、熊野権現より神託をうけ立教開宗した地でもある。中世においても時衆の存在が重要視されていた聖地であり、現在においても熊野本宮と清浄光寺の繋がりは深く常に交流が行われている。これが『小栗実記』には遊行十四代太空の慈悲により蘇生し、熊野湯ノ峰にて湯治し復活する内容が書かれ、一部事実とは異なるが、湯ノ峰温泉が一遍によって開かれたともされている。また長生院には、太空に帰依し長生尼と称した照手姫が、小栗満重主従を供養した伝承があり「照手姫」と「満重および十勇士」の墓が安置され、参る人々が絶えない。このように史実と物語が融合し、それを人々の往来が広めていた事実が重要なのである。

また中世に於ける清浄光寺は、室町時代以降、鎌倉府により鶴岡八幡宮に並ぶ寺院として遇されており、永享七年（一四三五）に足利持

氏は百二十坪の仏殿を清浄光寺に造営している。室町幕府との化側割は、室町幕府四代將軍の足利義持が清浄光寺（藤沢道場）および遊行金光寺（七条道場）の時衆による遊行に際して、諸国関所の関銭免除を全国の守護に命じる過所を発給する等厚遇をしている（応永二十三年（一四一六）四月三日および応永二十六年（一四一九）十月廿日『足利義持御教書』）。しかし鎌倉公方の古河移転後、清浄光寺は外護者を喪失し、永正十年（一五一三）三浦義同と伊勢宗瑞（後の北条早雲）の戦火をうけて、ほぼ全焼する。その後、慶長十二年（一六〇七）遊行三十二代普光の代にいたる迄の九十四年間、清浄光寺は堂宇を再建することができず、遊行上人は藤沢上人として独住することが叶わなかった。このときの遊行上人は二十二代意楽であり、藤沢上人は欠位する事となった。そのため本来清浄光寺に独住すべき処、永正十一年（一五一四）江州上坂乗台寺に独住する。それ以降、遊行二十四代不外は豊後西教寺で独住、遊行二十五代仏天は敦賀新善光寺で独住、遊行三十代有三は敦賀西方寺で独住、遊行三十一代同念は日向光照寺で独住、遊行三十二代普光の水戸神応寺で独住する事となった。

遊行三十二代普光は駿府にて徳川家康と謁見後、家康からの寄進（天正十九年（一五九一）十一月『徳川家康寺領寄進状写』）などもあり、堂宇が復活し、慶長十二年（一六〇七）本来の藤沢上人として独住する。江戸期に於いては落ち着いた清浄光寺と思われたが、火災に悩まされる。まず寛文元年（一六六一）四月に本堂、客殿、庫裏を焼失している。寛文四年（一六六四）六月には尾張前大納言光友が本曾山中の材木数千株を寄進して、天和元年（一六八一）に本堂の落慶法

要を営んでいる。また寛政六年（一七九四）一月には方丈一字残らず焼失。同十一年（一七九九）に再建された。さらに天保二年（一八三二）十二月には、藤沢宿茅場で発生した火災のため、仏殿・日供堂・惣門・仁王門などを除き、のこりすべての伽藍が焼失しており、その後、天保四年（一八三三）より十年にわたって再建されている。近代以降は、明治十三年（一八八〇）十一月の藤沢宿の大火により、中雀門・土蔵など三棟を除くすべてが類焼し、明治三十年（一八九七）に入って再建された。しかし大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災により、ほとんどの伽藍は再び崩壊している。現在の伽藍は昭和十二年（一九三七）に再建されたものである。

度重なる災害等により、交流史を紐解くだけの史料は無いとされてきた清浄光寺であったが、かろうじて残った裏山の土蔵には近世文書を中心とした史料群が残されていた。これらは藤沢市文書館による概要調査と共に目録が作成されたが、その内容は表題のみの目録であった。また翻刻まで到った例としては、藤沢市文書館が編纂した『藤沢山日鑑』（現在二十八巻迄刊行）がある。これは清浄光寺の公用記録として正徳二年（一七一二）より現在まで書き継がれているものであり、年中行事・本山の宗務・末寺との交渉・旅先の遊行上人との連絡記事や宿場町藤沢の動向までもが、詳細に記述されている。しかし、それ以外の史料に関する調査は、表題の採録であり、史料の内容及体裁、法量などの詳細調査は行われていない。また調査はほぼ文献史料のみにとどまっており、寺院の活動を豊かに伝える絵画・彫刻・工芸などの史料との関わりについては、言及されていないのが現状である。

（3）研究対象史料と方針

近年、清浄光寺が設立母体である遊行寺宝物館の再整備により、中近世移行期の史料が多数発見された。これら史料群から、関連する既存文書との比較研究が迅速に行われ、中近世移行期における関東拠点寺院が、どのような形で武家・公家や周辺寺社と関係を持ち、拠点としての地位を確立していったのかを歴史的・仏教史的に把握し、その交流史を紐解き、点としての寺院に人物が重なり線となって地域を繋いでゆく基礎を見いだす試みが、この度開始されたJSPS科研費25370801 基盤研究（C）「清浄光寺新出史料を中心とした関東拠点寺院における中近世移行期交流史の基礎的研究」である。この研究は新出中近世史料を中心に、原本調査・整理・翻刻・公開をおこない、中近世移行期における関東拠点寺院を中心とした人・モノの交流史を解明する為の基礎的研究を目的としている。

これまでの清浄光寺に関する中近世史料は、一九七〇年代に行われた調査研究により、藤沢市史や神奈川県史などで目録化と共に公表されてきた。この結果、公的機関が概要調査に関わり全てを確認でき、概ね成果は出尽くしたと認識されていた。これは、度重なる清浄光寺焼失という出来事から「清浄光寺は、あまり史料が無い寺」とみなされてきたこと等が理由といえる。以上のことから、関東拠点寺院の中でも本山格の寺院でありながら、本格的な調査が行われていなかったといえる。今回、清浄光寺新出中近世史料を中心に調査・翻刻することとは、関東拠点寺院が持つ人およびモノの交流を解明するための基礎データを構築する事でもある。ここでの「人」とは朝廷・公家・武家・

僧であり、「モノ」とは贈答儀礼・土地・法式など、物質的・精神的なものも含まれている。そこには儀礼を介しての金銭授受などの「交流」が生まれる。この交流記録が文書を含めた史料群として現在に伝えられたのである。これらの史料を元に、過去実施された調査の成果を集約し、比較検討できる環境を整えなければならない。そこで確認できている中近世史料の詳細な調査を行い、同時にその成果をもとにデータベース化し、比較検討できる土台を作成すれば、関東拠点寺院に於ける交流史を解明する研究へとつなげることができるのである。中近世移行期における寺を中心とした人的交流は、点としての寺院に人物が重なり線となって地域を繋ぐ。本研究は、拠点寺院が構築した、人とモノの交流を解明するための基礎を見いだす事ができ、拠点寺院であるからこそ行える交流の意義を明らかにすることができる。

そこで本研究の研究対象となる清浄光寺新出中近世史料と関連史料である。清浄光寺中世史料は先行研究の報告例として『改訂新編相州古文書第五卷』（一九七〇）、藤沢市発行『藤沢市史第一巻資料編』（同年）、『神奈川県史資料編3 古代・中世（3上）』（一九七五）の中に写真と共に翻刻紹介されている。また、これらを元にして高野修氏が『時宗中世文書資料集』（一九七八）を編纂している。この段階で清浄光寺が保持してきた中世文書は概ね解明されたとされ、その後は本格的な調査が入ることはなかった。この事が、今日の清浄光寺中近世史料の研究を停滞させていた原因となっている。また、市史や県史に翻刻された清浄光寺中世史料は、すべて東京大学史料編纂所所蔵の影写本を底本に編纂され、掲載されている史料写真も影写本の画像

であった。その為、原本は失われ影写本が唯一のような扱いをされていたのである。だからこそ内容の信憑性に関しては疑問視されていた点もあった。

今回研究対象となる中近世史料の中には、先に記載した疑問点を払拭する多くの原本が確認できた。これらは天皇や公家・將軍をはじめとする武家・各地の寺社との交流に関するものであり、清浄光寺が拠点寺院であったことを物語る史料群である。ここで先行研究と比較対象となり得る史料や新出史料の一部を列記しておく。なお史料名は清浄光寺の史料リストによる。

史料名	年月日
時阿土地売券	応安五年八月十六日（一三七二）
足利義持御教書	応永二十三年四月三日（一四一六）
足利義持御教書	応永二十六年十月二十日（一四一九）
足利持氏書状	三月十日（室町時代）
畠山ト山書状	二月二十九日（室町時代）
足利義澄御内書	四月二十七日（室町時代）
足利義澄御内書	五月十四日（室町時代）
三浦義綱書状	五月十日（室町時代）
武田信虎書状	十二月五日（室町時代）
大内義隆書状	九月二十八日（室町時代）
今川義元書状	十二月十三日（室町時代）
武田信玄判物	元龜二年七月十六日（一五七二）

足利義昭御内書

五月十七日（室町時代）

足利義昭御内書

六月二日（室町時代）

足利義昭御内書

七月十九日（室町時代）

佐竹義重判物

九月三日（室町時代）

佐竹義久判物

一月八日（室町時代）

柳原資定書状

八月四日（天文十三年・一五四四）

徳川家康寺領寄進状写

天正十九年十一月日（一五九二）

伝馬朱印状

寛永十八年八月二日（一六四一）

伝馬朱印状

慶長十八年丑三月十一日（一六二三）

南門上人和歌

貞享四年（一六八七）

宇賀神再建書状

寛政十二年二月二十四日（一八〇〇）

靈元天皇宣旨

寛文十二年八月十日（一六七二）

後水尾天皇宣旨

寛永六年八月廿三日（一六二九）

後水尾天皇宣旨

寛永六年八月廿三日（一六二九）

正親町天皇宣旨

天正十四年四月五日（一五八六）

正親町天皇宣旨

天正七年九月十二日（一五七九）

後奈良天皇宣旨

天文六年十月二日（一五三七）

後柏原天皇宣旨

大永二年九月十四日（一五二二）

後柏原天皇宣旨

永正十年三月四日（一五一三）

後土御門天皇宣旨

明応六年六月七日（一四九七）

後土御門天皇宣旨

文明十六年十月七日（一四八四）

後土御門天皇宣旨

応仁元年五月廿日（一四六七）

後小松天皇宣旨

応永十九年四月七日（一四一二）

長慶天皇宣旨

康暦二年二月十一日（一三八〇）

これら以外にも女房奉書などを含む多数の史料がある。その中には、清浄光寺所蔵史料と東京大学史料編纂所所蔵の影写本との相違点も確認される。この事は清浄光寺所蔵史料・影写本以外の存在をも想像させる発見となった。ここに記載していない新出史料等は、今後随時公表してゆく予定である。

おわりに

清浄光寺所蔵の中近世史料は、再調査によって一万件近い中近世文書などが残されている事が確認できた。清浄光寺に関わった人とモノの交流に、新しい見解を見いだせるだけの貴重な史料群である事は間違いない、過去の調査報告書を含めて新出中近世史料を調査・整理・翻刻することは、今後の時宗研究および寺院交流史研究に於ける重要な基盤となるといっても過言ではない。比較精査が進めば、先行研究の狭間を埋めることができ、多角的な内容分析を行なう環境が整うのである。本研究は中近世移行期における関東拠点寺院の交流史を紐解く為の基礎を構築するものであり、その成果は出版などしかるべき方法で公表することを目標にする。これが本研究の主たる対象である清浄光寺新出中近世史料および関連史料の調査・整理・翻刻の成果を世に示す事の意義である。本研究によって得られる成果としては、史料本文や宛所として登場する武家・公家・寺社などの人物・組織を軸に、点としての寺院に人物が重なり線となって地域を繋ぐ。関東拠点寺院

の一つである清浄光寺が、中近世移行期においてどのような人物と交流していたのかを解明する手がかりとなり得る。そして詳細な分析が行われることにより、関東拠点寺院としての清浄光寺における交流史を解明する事ができる。(遠山)

二 室町幕府と時衆

ここでは、清浄光寺所蔵の新出中世史料の中で、室町幕府と時衆の交流を考える上で重要な史料について、紹介しておきたい。

今回紹介する史料は、応永二十三年(一四一六)四月三日・応永二十六年(一四一九)十月二十日『足利義持御教書』である。この二点は、既に『改訂新編 相州古文書 第五卷』(一九七〇)、『藤沢市史 第一巻 資料編』(一九七〇)、『神奈川県史 資料編3 古代・中世(3上)』(一九五七)、『時宗中世文書史料集』(一九七八)などで紹介されているが、全て東京大学史料編纂所所蔵の影写本が底本となっている。

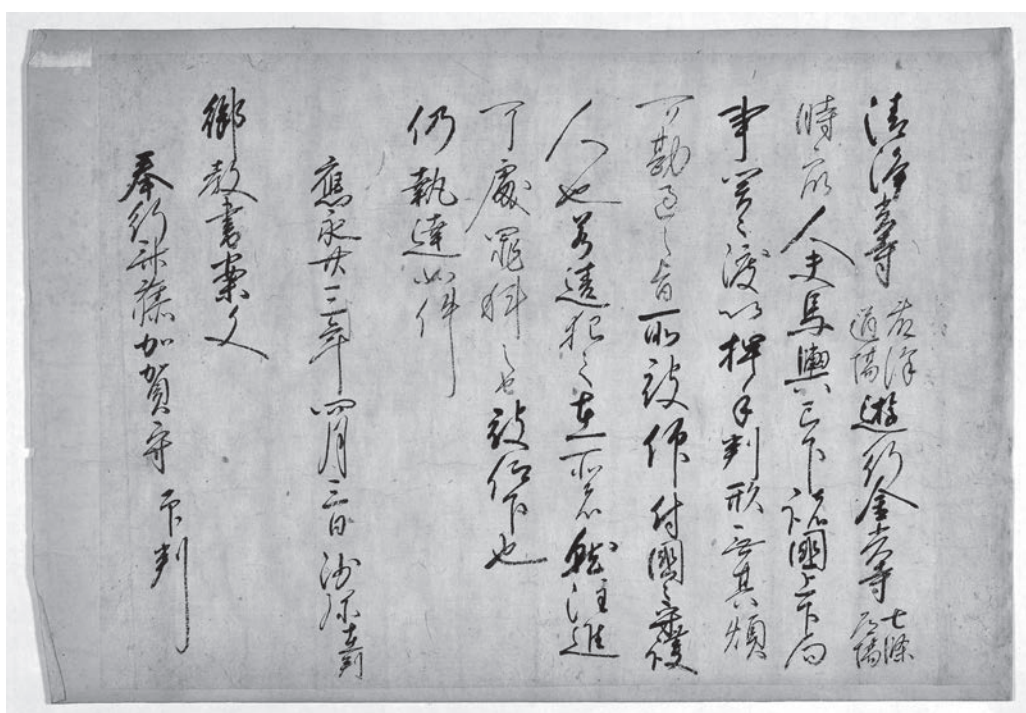
清浄光寺には、この二点の案文が伝来し、原本が確認されていない。また、原本が確認されない理由は関連史料もなく詳細なことは分からないが、これまでの清浄光寺の火災などにより、失われてしまった可能性が高いと思われる。

この二点は、室町幕府四代將軍の足利義持の意を奉じて、管領細川満元が発給した過所であり、両者とも『室町將軍家御教書案』とした。

応永二十三年のものには宛所はないが、応永二十六年のものには「当寺」として宛所が出てくる。この「当寺」とは清浄光寺のことを指しているように。

次に、過所とは諸国にあった関所通行に際し、関銭等の免除をする関所通行許可証である。過所は、至徳(二三八四〜七)・明德(一三九〇〜九四)年間以降、室町幕府の將軍、管領、あるいは奉行人によって発給された。この過所発給権は、幕府の將軍に帰属する重要な権限の一つであった。建武四年(一三三七)から文正元年(一四六六)までに室町幕府が発給した過所の宛所として登場する寺社は、京都の離宮八幡宮、鴨社、臨川寺、南禅寺、東福寺、天龍寺、近江の園城寺、奈良の興福寺、東大寺であり、関東の寺社としては清浄光寺が唯一である(注7)。この点は、清浄光寺が室町幕府から厚遇されていた寺院であったことをよく示している。

では、清浄光寺で所蔵する二点について、それぞれの史料本文、読み下し、史料写真等を紹介しておく。なお史料翻刻にあたり、文字はすべて新字体に改めたことをお断りしておく。



応永二十三年（一四一六）四月三日 『室町將軍家御教書案』

史料一 応永二十三年四月三日付 『室町將軍家御教書案』

清浄光寺藤沢・道場・遊行金光寺（京都）七条・道場

時衆人夫・馬・輿已下、諸国上下向

事、関々渡以押手・判形、無其煩

可勘過之旨、所被仰付国々守護

人也、若違犯之在所者、就注進

可処罪科之由被仰下也、

仍執達如件

応永廿三年四月三日

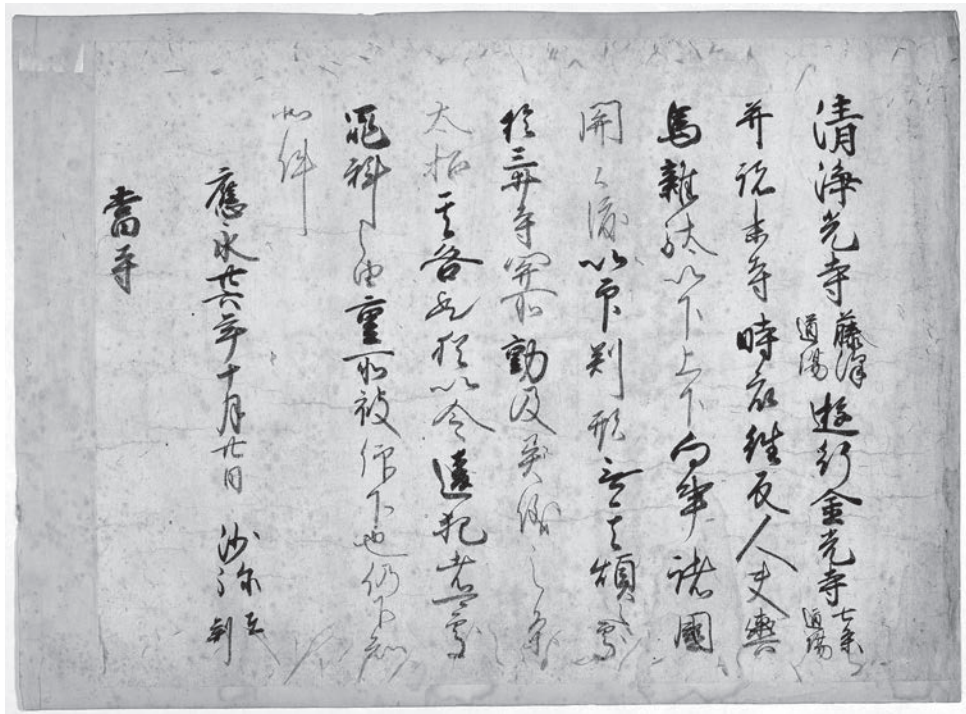
（管領細川満元）
沙弥在判

御教書案文

（基喜）
奉行斎藤加賀守印判

【読み下し】

清浄光寺藤沢道場・遊行金光寺七条道場の時衆の人夫・馬・輿已下、諸国上下向の事、関々の渡、押手・判形を以って、その煩いなく、勘過すべきの旨、国々の守護人に仰せ付けらるる所なり。もし違犯の在所は、注進に就いて罪科に処すべきの由、仰せ下さるるなり。よって執達件の如し。



応永二十六年（一四一九）十月二十日 『室町將軍家御教書案』

史料二 応永二十六年十月二十日付 『室町將軍家御教書案』

清浄光寺藤沢道場・遊行金光寺七条道場

并諸末寺時衆往反人夫・輿・

馬・雜駄以下、上下向事、諸国

関々渡以印・判形、無其煩之処、

於三井寺関所、動及異儀之条

太招其咎歟、猶以令違犯者、可処

罪科之由重所被仰下也、仍下知

如件

応永廿六年十月廿日 沙（管細川満也） 弥判

当寺

【読み下し】

清浄光寺藤沢道場・遊行金光寺七条道場ならびに諸末寺の時衆の往反の人夫・輿・馬・雜駄以下の上下向の事、諸国関々渡、印・判形を以つて、その煩いなきの処、なお三井寺の関所に於いて、ややもすれば異儀に及ぶの条、はなはだその咎を招くか。なおもつて違犯せしめば、罪科に処すべきの由、かさねて仰せ下さるるところなり。よつて下知件の如し。

史料一の発給者の細川満元は、応永十九年（一四一二）三月十六日から同二十八年（一四二一）七月二十九日まで管領職にあり、ときに入道して道観といった。本史料の差出に「沙弥」とあることから、細川満元が道観といていたときのものと考えられる。

史料一の内容は、管領細川満元が將軍義持の意を奉じて、清浄光寺（藤沢道場）、京都の金光寺（七条道場）の時衆の人夫・馬・輿などが、諸国関所の関銭免除などを諸国の守護に命じたものである。また、発給年月日の次の行に「御教書案文」とある。この文言は、史料一が作成された当時、清浄光寺や七条金光寺において、史料一が將軍足利義持から発給された御教書の案文として機能していたことが考えられる。このため、史料一の史料名を写ではなく、『室町將軍家教書案』とした。

この時の藤沢上人は七代尊明であった。尊明は京都の七条金光寺七世を経て、応永八年（一四〇一）一月十四日藤沢道場で遊行上人を相續し、賦算・遊行すること十二年に及んだ。室町幕府三代將軍義満夫人や四代將軍義持から帰依を受け、長く京都の七条道場にとどまった。この後、応永十九年（一四一二）三月に遊行十一代藤沢六世自空の入寂に伴い、尊明は清浄光寺に入り、遊行十四代太空に遊行相續し藤沢上人となった。その後、鎌倉公方の足利持氏の帰依を受けた。応永二十四年（一四一七）四月十日、清浄光寺で入寂した。すなわち、尊明は史料一の過所の発給の主体である足利義持と親密な関係にあったといえる。この点は、史料一が発給される上で重要な人間関係といえる。次に、「遊行金光寺七条道場」である。金光寺は、京都七条河原口塩小路にあった。正安三年（一三〇一）、遊行二代真教（一二三七）

一三一九）が弟子の吞海（後の遊行四代）に命じて仏師康弁法橋の喜捨した京都七条河原口の邸宅に金光寺を建立したという。史料一の当時、金光寺は遊行上人が住職の寺であるため、遊行金光寺と併記されていた。この時の遊行上人は、十四代の太空であった。太空は、応永十九年（一四一二）三月二十六日に七条道場で遊行相續し、応永二十四年（一四一七）の遊行十三代藤沢七世尊明の死去にともない、藤沢上人となった。すなわち、「遊行金光寺七条道場」とは遊行十四代太空を指しているよう。

最後に史料一で確認しておきたいのが、最後に記された「奉行齋藤加賀守印判」の部分である。齋藤加賀守とは、応永十七年（一四一〇）から応永二十九年（一四二二）まで室町幕府の奉行人であった齋藤基喜である。齋藤基喜は、応永二十五年（一四一八）六月二十日に興福寺に対して、同寺塔婆材木の運搬に関する過所を下知状形式で発給している（注8）。この点からすれば、史料一とともに、清浄光寺宛の奉行人の齋藤基喜から発給された過書があったことが想像される。この点については、今後の課題としておきたい。

史料二であるが、応永二十六年（一四一九）十月二十日付けで、將軍足利義持の意を奉じて、管領細川満元が発給した過所である。「沙弥」とあるのは、管領細川満元のことである。こちらも史料一と同様に、足利義持から発給された御教書の案文として機能していたと考えられる。したがって、史料二の史料名も、『室町將軍家御教書案』とした。

史料二の内容は、清浄光寺（藤沢道場）、遊行金光寺（七条道場）、全国の末寺の時衆の人夫・輿・馬等が、三井寺の関所において不都合

があったため、それを止めるよう命じたものである。三井寺は、現在の滋賀県にある天台宗寺門派の本山である。史料二は史料一から三年後に発給されたものであるが、史料一が発給された後、三井寺の関所において、関銭免除などに於いて不都合があったといえる。そのような事情があり、清浄光寺側から申請があり、史料二が発給されたものと考えられる。この時の藤沢上人は遊行十四代藤沢八世太空中で、遊行上人は遊行十五代尊恵である。

清浄光寺には、現存しないが、東京大学史料編纂所所蔵の影写本には、もう一点、永享八年（一二三六）十二月五日『室町幕府管領細川持之奉書写』（史料名は『神奈川県史資料編3 古代・中世（3上）』によった。先の史料一・二の史料名に準じれば『室町將軍家御教書写』となる。）の過所がある。この過所は、八代將軍の足利義教の意を奉じて、管領細川持之により発給されている。当時の藤沢上人は遊行十四代藤沢八世太空中で、遊行上人は遊行十六代藤沢九代南要であった。この過所は原本などは確認されていないが、史料一・二とともに、清浄光寺と室町幕府との交流の歴史、さらに過所に基づき行われた時衆と各地の人・モノとの交流の歴史をひも解く重要な史料である。今回、清浄光寺で所蔵する二点の過所を中心に解説してきたが、今後他の史料も含め、総合的に分析を進めていきたいと思う。（皆川）

注1 一遍 延応元年（一二三九）→正応二年（一二八九）伊予国豪族河野通

信の五男である道広の二男として生まれる。諱は智真、幼名を松寿丸という。宝治二年（一二四八）十歳にて出家、随縁と改める。建長三年（一二五二）太宰府にて、法然門下、浄土宗西山派の祖、証空の弟子、聖達および肥前清水寺の華台の下で十二年間浄土教を学ぶ。正応二年八月二十三日、兵庫観音堂（現在の神戸真光寺）にて入寂。

注2 二相他阿真教 嘉禎三年（一二三七）→文保三年（一二三九）京都の人と

される。建治三年（一一七七）一遍九州修行の際、大友兵庫頭頼泰の元に滞在中、一遍との一夜の法談により感動、ただちに一遍の同行相親（同じく行をする者）となる。その際真教に対して命名した阿号が「他阿弥陀仏」である。これは「自も阿弥陀仏、他も阿弥陀仏」した事からである。一遍の死後、法燈を継ぎ、全国を遊行しつつ時衆教団を形成。兵庫真光寺を大道場とし、京都（下京区）に金光寺（七条道場）を建立。嘉元元年（一二三三）無量光寺、当麻道場を建立。なお「他阿」とは「他阿弥陀仏」のことであり、「他阿上人法語」に「知識のくらゐになりては、衆生の呼ぶところの名なれば、自今已後は量阿弥陀仏を捨て、他阿弥陀仏と号せらるべし、この名は一代のみならず、代々みな遊行かたにうけつぐべきなり」とあり、真教以降の遊行上人はすべて「他阿」を名乗っている。

注3 遊行三代智得 弘長元年（一二六二）→元応二年（一二三〇）量阿。中上人。

加賀堅田で出生。嘉元二年（一二三〇四）一月十日真教より法燈相統。

注4 遊行四代吞海 文永二年（一二六五）→嘉暦二年（一二二七）相模国俣野

庄地頭、俣野五郎景平の弟。有阿弥陀仏。正安三年（一一三〇一）京都七条道場金光寺創建開山（七条仏所より定朝の邸跡を寄進。文保三年（一二二九）四月六日因幡国（鳥取）味野西光寺にて智得より法燈相統。遊行廻国中に三代智得が入寂。その時、智得の側近にあった内阿真光が智得の遺言であると称して自ら遊行上人であるとして他阿を名乗り対抗した。その為、吞海は無量光寺に入ることができず、清浄光寺を建立する事となる。

注5 延文元年（一二五六）銘のある清浄光寺梵鐘（神奈川県指定重要文化財）に「清

浄光院」とあり、また清浄光寺本堂には後光厳天皇による「清浄光寺」の勅額がある。この事から、延文元年から後光厳天皇の没年である建徳二年（応安四年三月二十三日（一三七一））までの十五年間に寺号が付けられたと推測できる。

注6 遊行十四代藤沢八世太空 永和元年（一三七五）～永享十一年（一四三九）

駿河（静岡）足洗氏より出る。応永十九年（一四一二）三月二六日金光寺（七条道場）にて尊明より法燈相統。応永二十五年（一四一八）十月六日「敵御方供養塔建立」

注7 小林保夫「四南北朝・室町期の過所発給について―室町幕府職制史の基礎的考察―」（『日本古文学論集 8 中世Ⅳ』吉川弘文館、一九八七年）

注8 応永二十五年（一四一八）六月二十日付「室町幕府下知状」（『尼崎市史 第四巻』、一九七三年）

参考文献

『遊行系図』原本 江戸時代 清浄光寺蔵

『予章記』原本 室町時代 清浄光寺蔵

『小栗実記』『小栗外伝』『小栗判官照手姫』『小栗略縁起』共に江戸期版本

『定本時宗宗典』上下 時宗開宗七百年記念宗典編集委員会編 時宗宗務所発行

『時宗辞典』時宗宗務所教学部（一九八九）

『時宗入門』時宗宗務所発行（一九九七）

『改訂新編 相州古文書 第五巻』（一九七〇）

『藤沢市史 第一巻 資料編』藤沢市発行（一九七〇）

『神奈川県史 資料編 3 古代・中世（3上）』神奈川県発行（一九七五）

『藤沢山日鑑』全二十八巻 藤沢市文書館編

『遊行・藤沢歴代上人史』祐宜田修然・高野修

『時宗中世文書資料集』高野修編

『時宗近世史料集』第一～第三 高野修編

『宗教法人「時宗」宗制並宗規』時宗宗務所編

『遊行寺』遠山元浩・高野修著 遊行寺発行

『日本古文学論集 8 中世Ⅳ』日本古文学学会編（一九八七）

『尼崎市史 第四巻』（一九七三）

※本論文の「一清浄光寺所蔵新出中近世史料とその可能性」は遠山元浩が、「二室町幕府と時衆」は皆川義孝がそれぞれ担当した。

本研究はJSPS科研費 25370801 基盤研究（C）「清浄光寺新出史料を中心とした関東拠点寺院における中近世移行期交流史の基礎的研究」の研究成果の一部である。